

学びの場として機能するスクール・コミュニティの検討

—大人の学びからはじまる子供とのつながり—

服部 直幸 高度教職開発コース 教育課題探究プログラム

キーワード：学びの場，スクール・コミュニティ，大人の学び，連携・協働

1. 問題の所在と研究の目的

近年，学校教育と社会教育の一体的推進が求められている。これは，学校と地域の連携・協働によって子供とともに大人の学びの充実が図られ，生涯学習社会の実現が目指されることによる。しかし，実際は環境整備作業やプリントの採点，読み聞かせといった地域による学校への一方向的な支援活動が大半である。すなわち，学校からの依頼によって大人が学校に訪れる機会が設定され，大人の学びの充実が図られていく連携・協働の体制にはなっていない。三鷹教育・子育て研究所の中間報告（2021）によれば，子供や学校を縁とした地域住民のつながりを指すスクール・コミュニティについて「大人たちが学び，成長をしていく場であり，「学びと活動の循環」の実践を通じた社会教育・生涯学習の場としてさらに魅力あるものとしていくことが必要である」とした上で，同研究所の最終報告（2021）の中では「スクール・コミュニティが（大人の）学びの場として機能することで，子供たちが大人たちと一緒に学び合ったり，大人たちの姿を見て学んだりする機会にも繋がる」と学校と地域の連携・協働への有効性について述べている。学校や地域の実情と関係性は多様であるため，筆者の所属校においてスクール・コミュニティが学びの場として機能していくためにどのようなことが重要となるのかについては，実践を通して明らかにしていくことが求められる。

そこで本研究は，学校支援ボランティアを対象にした学びに関する意識調査と「学びの場」づくりを通して，スクール・コミュニティが学びの場として機能するための学校と地域の連携・協働の在り方について検討することを目的とする。

2. 研究方法

筆者の所属する公立小学校において，スクール・コミュニティの現状と学校との関係意識について学校支援ボランティアへの聞き取り調査を実施し，地域住民の学びの意識と試行する学びの活動の実態から，学校における大人の「学びの場」づくりに向けた場と活動のあり方について整理する(3.3.1)。

調査の整理をもとに「学びの場」を実践し，参加者の感想と場の実態から「学びの場」の活動の構成と持続性に着目してスクール・コミュニティが学びの場として機能することについて考察し(3.3.2)，学校と地域の連携・協働の在り方について検討する。

3. 研究の実際

3.1 調査の内容

令和2年度，所属校において花壇の整備作業や庭木の剪定講座，ボランティア総会など

の学校支援活動が実施された。参加者は、知り合いや子供たちとの再会・交流を楽しみとして、支援活動に満足感をもっていることが感想から明らかとなった。また、地域コーディネーターと教頭によって支援活動から学びの活動への転換を試みた「庭木の剪定講座」では、これまで学校に訪れたことのない地域住民の参加を得られた。これは、自宅でも生かせるスキルを獲得しながら学校のために活動できることや、子供たちに何かを教えなくてもよいという学校への訪れやすさが影響していることが感想から明らかとなった。一方で、学校から支援依頼が限定的であり、特定の地域住民しか訪れることができない状況を危惧したり、活動場所への直行直帰によって参加者同士の仲が深まりにくいと感じていたりする人がいることも明らかとなった。子供たちが参加者の姿をベランダから観察して興味を示したり、お互いに話しかけて会話を楽しんだりするなど、大人の学びが子供とつながる可能性を感じることでできる事例であった。

調査の整理から、表 1 に示す場の整備と活動の設定によって、学校における大人の「学びの場」を推進できると考え「北マルシェプロジェクト」（以下、「北マルシェ」）の実践に移った。

表 1 「学びの場」づくりにおける場の整備と活動の設定

- | |
|---------------------|
| ①ボランティアが過ごせる場の整備 |
| ②コミュニケーション重視した活動の設定 |
| ③支援活動を生かした学びの活動の設定 |

3.2 「北マルシェ」の実践

令和 3 年度に筆者は地域コーディネーターとともに、「北マルシェ」において表 2 の 3 つのテーマで活動を実践した。コミュニティルーム（旧第 2 理科室）を活動拠点として、チラシとメールおよび HP を使って活動を多方面に周知して参加者を募った。

表 2 筆者と地域コーディネーターにより企画された活動（抜粋）

活動名 (テーマ)	活動内容
パソコン・スマホ講座 (ICT)	パソコンの分解・組み立て、オンライン会議体験、プログラミング体験、スマホアプリの使い方と迷惑メール対策、学校応援団ロゴ作成
北小花曜日 (花)	ドライフラワーづくり、フラワーキャンドルづくり、校内植物探検、ミニ盆栽づくり、庭木の剪定講座
北カフェ (カフェ)	パソコン・スマホ講座後のカフェ、大人のビブリオバトル後のカフェ、読み聞かせ後のカフェ、花壇整備後のカフェ、庭木の剪定講座とカフェ

(1) パソコン・スマホ講座

ICT は、子供たちのクラブ活動で実際に行われている内容など、面白さや便利さを体感する場として設定した。クラブ活動の講師を務める A 氏も加わり、参加者が思考する時間や工夫できる場面、コミュニケーションを重視して全 5 回の活動を計画し、4 回実施した。参加者は「やってみたくて思っていたことに挑戦できた」「内容は難しく理解しきれなかったが、参加者とおしゃべりしながらできたことが楽しかった」と感想を話した。また、これまで顔見知りであった参加者の 2 人は、講座をきっかけにして会話したり、スマートフォンアプリを使って連絡をとり始めたりした。チラシを見て講座の活動に興味をもった 2 学年の担任は、国語科におけるインタビュー活動の学習をパソコン・スマホ講座に合わせて計画・実施した。子供たちは、参加者にインタビューを行ったり、タブレット端末を用いた学習方法を紹介したりしていた。また、休み時間には参加者と子供たちが一緒に過

ごす様子も見られた。A 氏は、講座の運営や参加者とのかかわりを通して、大人の学びをどのように学校や子供と結びつけていくことができるのか考えていた。

(2) 北小花曜日

花は学校の特色であり、従来の花に関する支援活動への参加者が一定数いたことや、地域住民による主体的な花生け活動の先行事例を参考にして設定した。中心となる活動は予め設定し、その他は参加者の集まり具合や意見によって計画を詰めるようにした。活動を重ねるごとに参加人数は増加傾向となり、3 回目の活動時には参加者の B 氏から「今度みんなでリースづくりをしませんか」との提案があった。参加者らと企画を進めて活動の実施に至り、それ以降も季節に合わせた活動が継続した。また、2 学年担任が活動の様子に興味をもち、コミュニティルームでの子供と地域住民の関わりを仕組みながら、図画工作科でのリースづくりの授業が行われた。授業後には参加者から、子供の豊かな発想や活動環境の改善、子供たちへのサポートの在り方について感想や反省が述べられた。

(3) 北カフェ

カフェは、学びの活動や支援活動の参加者のコミュニケーションを促進させるために設定した。飲み物や菓子などを地域コーディネーターや筆者らによって振舞った。参加者は、飲食の時間を通してお互いに参加したきっかけを話し始めたり、地域の仕事や子供たちの活動の様子、昔の学校について会話したりする様子が見られた。また、「北マルシェ」の活動が話題となると、次回の活動の参加を決めたり、子供たちとの活動の協力を引き受けたりする様子が見られた。現在では、利用者の意見によってコミュニティルームに貯金箱が設置され、厚志や現物の持ち込みによって、スクール・コミュニティにカフェの活動が位置づき始めている。北カフェでも参加者と子供たちとのふれあいが生まれ、6 年生の総合学習では、その中での気づきや発見を活動に生かして取り組む様子が見られた。

(4) 考察 — 「北マルシェ」の活動の構成と持続に着目して—

「北マルシェ」に参加した地域住民は、学びの活動をきっかけにしてコミュニケーションを充実させてつながりをつくり、学びの活動を起こすまでに至った。筆者はこのことが、スクール・コミュニティが学びの場として機能することであると捉えた。この要因について、「北マルシェ」の活動の構成と持続の視点から考察する。活動の構成の視点からは次の 3 つの要素が重要であることが示唆された。1 つ目に創造性のある活動である。創作活動は、参加者同士の助け合いの会話や行動につながっていた。また、その作品によって周囲の人に活動が可視化されていた。このことは、地域住民の学びのきっかけと参加者のコミュニケーションの充実にも果した影響が大きい。2 つ目に活動の柔軟性である。参加者の実態やニーズに合わせて活動内容を修正することや、活動計画に余白を残すことで、参加者が興味関心のあることをさらに追究したり、やってみたいことを参加者で検討したりする様子が見られた。このことは、参加者が主体となって学びを進めたり、起こしたりすることのきっかけとなった。3 つ目に親和性を高める活動である。飲食を共にすることで会話を通して活動への興味・関心のほかにも共通点が見つかり、コミュニケーションを豊かにした。このことは、参加者の活動の充実感やつながりの形成・深まりにつながった。

次に、活動の持続の視点からは次の 2 つが大きな要因であることが示唆された。1 つ目にコーディネーター的存在である。「北マルシェ」には、自らが学ぶことを楽しみ、学びのきっかけを創り出し、積極的に多様な人を巻き込む存在が複数あった。このことは、ス

クール・コミュニティの学びの意識を高めたり維持したりするために重要な役割を果たしていたと考える。2 つ目に、大人の学びの充実から生まれる子供とのつながりである。本実践では、子供たちとつながることを前提とせず、大人が学びを楽しむことを重視して活動の展開を図ってきた。空間や情報を共有することを通して、結果として大人と子供のつながりが生まれた。そして、大人は子供や学校への理解とともに学校で学ぶ意義を考え始めた。これは、持続可能な活動づくりの視点「自分のやりたいこと」「自分のできること」「学校が求めていること」を含むつながり方であり、スクール・コミュニティが学びの場として機能し続けるために重要な要因である。

4. 研究の成果と課題

研究を通して、スクール・コミュニティが学びの場として機能するための学校と地域の連携・協働の在り方について整理した。まず、学校における大人の学びのきっかけづくりを連携して進めることである。本実践の「学びの場」においては、創造性・柔軟性・親和性のある活動の構成とコーディネーター的存在がそのきっかけづくりの役目を果たした。これまで支援活動に取り組んできたスクール・コミュニティにとって、学び始めるきっかけはつかみづらい。近年では、学校が地域住民と子供たちとのふれあいの場として空き教室を開放する事例も見られるが、地域住民の学びの場としても検討され、大人の学びが図られる連携が重要である。

次に、大人の学びと子供の学びの緩やかなつながりによる協働を目指すことである。本実践では、大人自身が学びを楽しむということを重視してきた。その結果として、大人と子供のつながりが生まれ、大人の中に子供や学校との連携・協働に関する意識が醸成され始めた。緩やかなつながりとは、大人の学びと子供の学びがつながることを前提としたつながりではなく、互いの学びや姿に惹かれて起こる自律的なつながりのことである。そのつながりが、スクール・コミュニティが学びの場として機能するために重要である。

一方で課題としては、持続可能な地域づくりや社会に開かれた教育課程の実現に向けて、地域課題や学校課題に大人の学びの意識が向いていくことである。学びのきっかけをどのようにつくるのができるのかを今後の課題としたい。

文 献

- 三鷹子育て・教育研究所 (2021) 「三鷹のこれからの教育を考える研究会 最終報告」
三鷹子育て・教育研究所 (2021) 「三鷹のこれからの教育を考える研究会 中間報告」
青木一・勝山優子 (2021) 「スクール・コミュニティにおける「子供の育ち」と「コミュニティの豊かさ」をつなぐ一体的好循環の検討—ブレッケ (スウェーデン) とレッジョ・エミリア (イタリア) に学ぶまちづくり—」
小西哲也・中村正則 (2019) 『奇跡の学校—コミュニティ・スクールの可能性—』風間書房
中央教育審議会 (2018) 「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について (答申)」
中央教育審議会 (2015) 「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について (答申)」
山崎亮 (2015) 『ふるさとを元気にする仕事』筑摩書房